

原酒

砂漠を走る！
2011 Gobi March参戦記

長谷川有美 Naomi Hasegawa

和光研究所 脳科学総合研究センター
適応知性研究チーム 専門職研究員

私は理研脳科学総合研究センター (BSI) で、人間同士や人間と環境の関係性を認知するときの脳機能を解明する研究に携わっています。獣医である私の主な仕事は、実験動物の獣医学的管理と実験手技の開発で、これにより再現性のある良い実験データの取得を目指しています。理研に勤務する以前、趣味のランニング仲間から中国領ゴビ砂漠の250kmを1週間かけて走る“Gobi March”を完走した話を聞きました。その内容に驚き、半ばあきれの一方で、「砂漠という非日常の世界にわが身を置いたら……」と好奇心が湧き起こり、「いつか走ってみたい」という思いがくすぶるようになりました。そしてとうとう、上司をはじめ職場仲間の温かな理解を得て、2011年6月26日～7月2日のレースに参加することになったのです。

Gobi Marchは、六つのステージをそれぞれ制限時間内に走るレースです。各ステージの平均走破距離は40km。しかし、終盤のステージ5は80kmというロングステージで、日没後から翌朝までヘッドランプをつけながら暗闇の砂漠の中を進まなければなりません。名前はGobiですが、実際のコースは中国のタクラマカン砂漠の辺りに設定されていて、標高はマイナス170m (世界で2番目に低い) ～約2200mと起伏があり、途中何度も川を渡るなど変化に富んでいます。コース上には目印として50～100mおきに女性の手のひらサイズほどのピンク色の小旗が立っていて、砂漠の色と同化してしまいがちなその小旗を探しながら進むべき道をたどります。

コース周辺は“地球のオープン”と呼ばれている高温地域で、朝8時にスタートしたときから気温は40℃を超え、最高気温が50℃を超える日もあるほどです。そのような過酷な環境の中、トイレトペーパーから始まり、サバイバルナイフや足のまめ治療セット、着替え、寝袋など50に及ぶ必須装備品、さらに1週間分の食料 (1万4000kcal以上) と最低2.5リットルの水、これらすべてを背負って走らなければなりません。ウエアは汗が蒸発した後の塩分と砂で白くゴワゴワになり、給水ボトルの水はあつという間にお湯になってしまいます。水分を十分とっているつもりでも、油断すると視野が狭くなり、手足がしびれ、次の一步が思うようになくなります。そこで、15分おきに頭から水をかぶって塩をなめるのを

ステージ4のゴール。
手前が筆者。最終ゴール地点、火焰山にて。
日本人7名全員完走 (筆者は最右)。

繰り返しました。一日10リットル以上の水分を摂取しましたが、トイレに行くことさえ忘れるほどで、過酷な暑さ (熱さ!?) の洗礼を連日、日没となる夜10時すぎまで受け続けました。

さて、一日のノルマを果たし、たどり着いた先には、大会スタッフが設営した移動式の布テントが用意されています。寝床となるこの中では、国籍も性別も違う9名が地面の上、寝袋にくるまりながら健闘をたたえ合ったり、砂漠では手に入らないハンバーガーや冷えたジュースの空想話で盛り上がり……。楽しいテント生活でしたが、一方で映画に出てくるエイリアンのような、サソリを捕食する巨大クモが出現してパニックになったり、深夜砂嵐に襲われて暴風の中生きた心地がしないまま、朝目覚めたら身体中砂まみれになっていたりと、さまざまなハプニングもありました。

今回、世界各国からエントリーしたランナーは147名 (うち女性は36名)。完走者はそのうち116名 (うち女性29名) で、最年少は21歳、最高年齢は55歳でした。「何も好きこのんでそんな過酷な大会に出なくても」と思われる方が多いでしょう。しかし、便利な世界から隔離された砂漠という過酷で非日常的な環境に自らの脳を適応させ、生物として「生き抜くことに集中する」という経験は非常に貴重で新鮮、何よりも大きな感動があり、また便利過ぎる生活を再考するきっかけとなりました。

『理研ニュース』メルマガ会員募集中！

下記URLからご登録いただけます。

<http://www.riken.jp/mailmag.html>

携帯電話からも登録できます。



寄付ご支援のお願い

理研を支える研究者たちへの支援を通じて、日本の自然科学の発展にご参加ください。

問合せ先：理研 外部資金部 推進課 寄付金担当

TEL: 048-462-4955 Email: kifu-info@riken.jp
(一部クレジットカード決済が可能です)

理研 寄附金

<http://www.riken.jp/>